

汗を流した後、二人ずつ組になって正確な突き練習に入る。

とにかく基本動作を徹底的に行うという木村コーチも自ら練習に加わり、細かい技術指導をする。小・中学生でフェンシングをやってきた者はなく、誰もが一からのスタート。一年生は、半年間「基本練習漬」となる。三年間で全国トップクラスの選手を育てあげる秘訣は、このあたりにあるのかもしれない。「白紙の状態から始まるので、かえって教えやすい」と木村コーチ。

小・中学校にクラブがない競技にとって、底辺拡大は共通の課題。今年六月七日、小学生を対象に初のチッコフェンシング教室を開いた。主催は町フェンシング協会、同校部員が剣さばきを見せたり、子どもたちを相手に胸を貸すなどし、普及を図っている。

同校の練習には、大学で活躍して



基本練習が多い合川高校フェンシング部

いるOBが夏休みなどの休暇期間を利用して駆け付ける。昨年のソウルオリンピック出場の大森川明美選手（専修大）、今年のユニバーシアード夏季大会で元世界チャンピオンを下し七位に入賞した安部欣哉選手（拓大）、そろって拓大へ進学した昨年の国体

仕事とサッカーの両立が大事

初の単独チームで国体出場のTDK

TDKサッカー部は、今年初めて単独チームでミニ国体に出場し、成年一部代表決定リーグB組で一位となり国体出場を決めた。「成年二部出場の秋田市役所チームと少年の部が共に敗れたので、どうしても勝って国体出場権を得たかった」と言う佐藤一朗監督。昨年の県チームは、

すべての部で敗れ、出場権を逸したため、うれしい勝利となった。TDKサッカー部は、昭和四十五年の創部。選手は二十一人、女子マネージャー二人を含む総勢二十七人が部員である。佐藤さんは監督就任三年目。

練習は、月・金曜日を除く毎日、勤務終了後六時から二時間半行う。土・日曜日は、午前九時から正午までが練習時間だが、東北地区社会人

優勝メンバーなど。また、他県の高校が練習試合のため遠征してくることも多い。練習の中から自然と地力がついてくる。練習したことを試合に出せれば十分という木村コーチの言葉には、自信がみなぎっていた。

リーグ戦、地元の西目高校や由利工業高校との練習試合となることが多い。選手はほとんどが地元の高校を卒業しており、サッカーはスポーツ少年団から続けてきている。平均年齢が二十三・五歳と若い選手が多いチームだ。

由利郡金浦町にあるTDKの秋田総合スポーツセンターが練習場で、平沢、鳥海、象潟などの工場から選手が集まってくる。どの工場からも



ナイターで練習するTDKサッカー部

車で十五分程度と、集まりやすい場所にある。宿泊もできるので、合宿は専らここで行っている。

ナイター設備のある多目的広場で、佐藤監督の見守る中、選手たちのラニングが始まる。あらかじめ決められた練習内容を順番にこなした後、ミニサッカーのコートで三人対三人の攻守練習となる。この練習がサッカーの基本練習と佐藤監督。選手の動きを見る目が厳しくなった。

練習には、残業など勤務の都合で参加できない場合もあるが、あくまで仕事を優先している。職場でかわいがられなければダメと、佐藤監督は仕事とサッカーの両立を目指す。国体などの試合に参加するときは、特別休暇となる。業務に支障が出ないように会社側でも応援体制を敷いてくれている。

昨年は、天皇杯全日本選手権大会東北地区予選で二年連続三度目の優勝を果たし、全国大会に出場した。六十二年の沖縄国体では、秋田選抜チームが優勝したが、今度は単独チームでまとまりのあるところを発揮してあの勢いをとり戻したいところだ。全員一丸となったチームプレーで、「攻めのサッカーをする」と佐藤監督は力強く語った。